

# 福崎町文化

第31号 平成27年3月1日 兵庫県神崎郡福崎町福田176の1 福崎町文化センター発行





## 第41回 福崎秋まつり文化講演会

## 第1部 福崎町・遠野市友好都市提携記念講演より

## 遠野スタイルによるまちづくり

遠野市長 本田敏秋



平成二十六年八月二十三日に友好都市共同宣言を締結させていただき、

遠野市と福崎町がまさに地域と地域の絆によって、深く結ばれることを確認し合うことができました。福崎町からは、嶋田町長、志水議長、高

寄教育長はじめ、幹部職員の方においでいただき、調印式を行いました。考えてみれば、このご縁は、今から

百四十年前、一九一〇年、明治四十三年、柳田國男先生が著した『遠野

物語』に遡ることが出来ます。百十九話の不思議な話が収録され、序文には「願はくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」というメッセージを我々に残してくれているわけであり

まさにこのメッセージは、里人としての都会人、そして山人としての

中山間地域に生きる地方の人々が明治時代、富国強兵策という中であっ

て、近代化を目指していた日本に向

けられたものです。そういった中で、

地方が、農村が、疲弊していくとい

う時代の流れがありました。

この時代に、遠野出身の早稲田大

学生の佐々木喜善を「おもしろい学生

生がいるぞ」ということで、小説家

の水野葉舟が当時農商務省の役人であ

った柳田先生に紹介をしました。

当時佐々木喜善は、現在の文京区小

石川、凸版印刷本社近くに下宿して

いたとのことでした。

そして、現在は新宿の大妻女子大

学女子寮になっている所に柳田先生

が住んでいて、夜になると、佐々木

喜善が柳田邸に通い、遠野に伝わる

世にも不思議な話をいろいろ語った。

それを一つ一つ書き留めて、百十九

の話としてまとめて『遠野物語』と

して著したという百年以上前の歴史があるわけです。

この『遠野物語』があつてこそ、

今の遠野のまちが、あるのではない

のかなと思っております。佐々木

喜善と柳田先生という圧倒的な存在

の方との出会いの中から、名著『遠

野物語』が世に出たということにな

るわけであります。

それが、先般の八月二十三日、人

と人との繋がりが、福崎町と遠野市

が地域と地域の絆となって、友好都

市として連携することになりました。

そして、次の世代にどのような「ま

ちづくり」を残していくのかとい

うことが今問われているのではな

いかと思っております。

今日は、高寄教育長さんに福崎町

内の鈴の森神社、辻川山、北野天満

宮の学問成就の道、柳田先生をはじめ

松岡兄弟の銅像、柳田國男・松岡

家記念館などをご案内いただきました。

また、福崎町産業祭におきまし

て、私も大変な元気をいただきました。

まさに、農業、商業、工業が、

バランスのとれた中であつて、この

福崎町が成り立っているということ

を強く感じました。産業祭のブース

では、「市長、福崎町の元気を持つ

て帰れよ！」と励ましのエールもい

ただきました。この産業祭のこの大きなエネルギーを、遠野に持ち帰って、今後の元気に繋げたいと心に誓ったところであります。

それぞれのブースでの皆さんの笑

顔、大変素敵でありました。商工会

館二階の巨大迷路で子どもたちがは

しゃぎながら、非常に楽しそうに、

家族連れで走り回っている姿、そ

ぞれのブースにおいても、商工会女

性部の皆さん、青年部の皆さんが本

当に笑顔を絶やさず、町民の皆さん

に呼びかけておられました。その姿

こそがまさに「まちづくり」、「地

域づくり」の底力であり、産業祭、

文化祭の中から見出すことができた

と思えます。

福崎秋まつりは、四十一回目とい

うことです。から、伝統のある大きな

イベントではないのかなと思います。

私も本当に目で見、耳で聞き、そし

て肌で感じたことを皆様に報告を申

し上げ、「福崎町の元気を持つて帰

りなさい」というエールをきちんと

受け止め、遠野に帰り、遠野市民に

福崎町とどのような形の付き合いが

できるだろうか考えたいと思います。

お互いに柳田先生の「平地人を戦

慄せしめよ」という言葉の重さ、と

いうよりも、「しっかりとしろよ」と



いう励ましの言葉を今二十一世紀に生きる我々として、しっかりと受け止めていかなければいけないという決意を新たにしているところであります。

さて、福崎町の皆様に遠野のことをご紹介申し上げたいと思います。遠野は、人口が二万九千五百人。三万人をちよつと割った町であります。ただ、柳田先生が百四年前、遠野を訪れたとき、何でこの山の中にこれだけの賑わいを示しているんだということを、『遠野物語』の序文に書き記しているわけです。北上高地という八百メートルから千メートルくらいの中が連なっている中にごさいます。

岩手県では北上川流域の平野部の盛岡、花巻、北上、奥州市そして一関市に新幹線と高速道路が走っております。花巻空港もあります。岩手県の人口の六、七割はこの北上川流域に集積しており、産業もそこに集積しています。

そこから、ちよつと太平洋に向かって東側に入りますと、千メートル級の山が連なり、三陸海岸のリアス式海岸に落ち込んでいくという環境の中で、沿岸と内陸の中間点に位置するのが遠野盆地であり、面積が八

百二十五平方キロメートル、約一万世帯が住んでいるわけです。

遠野は、藩政時代から沿岸と内陸の交流の拠点として、人と馬が行き交うまちでした。市の日には「馬千匹、人千人」、或る本には「馬三千、人三千」と書いてある文献もあります。石高は一万二千五百石で南部藩の遠野領として筆頭家老が領主として治め、伊達藩との藩境の警護も担っていました。

学者の先生方のお話を聞きますと、遠野領は藩中藩と言われるくらいその主体性があり、独立心が強かった。そのような歴史の中に遠野というまちがあったということです。その領主は、南部藩の藩主から様々な権限を任せられ、人を処罰する権限まで任せられていたということでもあります。

今は女性の時代であると言われておりますけれども、すでに三百八十年以上前、遠野には清心尼公という女性の殿様がいました。男女共同参画社会と言われておりますけれども、すでに藩政時代には女性を殿様にして、領内を治めていたようであります。

そのようにすでに自立心と主体性の強いまちというものがありました。

そして、遠野盆地という寒暖の差も激しく、たびたび飢饉に襲われる状況の中で、お互い助け合うという精神は、遠野盆地の一町十カ村中に伝統として生きてきたということになるのではないのかと思っております。

柳田先生が遠野を訪れた一〇〇年前も、そのような遠野郷一町十カ村に「まちづくり」が行われており、人と物が行き交う交流・交易の「宿場まち」でもありました。沿岸部から四十キロメートル離れた遠野に買い物に来る人。或いは遠野の旧制中学に進学する人もいたということでもあります。

人と物が行き交う中にあり、沿岸から峠道を四十キロメートル、約十時間歩かなければ遠野に着かなかつた。そうなつてくると、峠道を越える時に、疲れ果てて、幻覚か幻聴でキツネに騙されたというように、佐々木喜善がそのような不思議な話を柳田先生に話をして聞かせたことから、『遠野物語』が生まれたということ。は、そのような自然的な、歴史的な、或いは風土的な、更には地勢的な要因によるものなのかなと思っております。

明治に入り、大正、昭和という時代の中で半世紀ごとに合併が繰り返

されたのが、日本の市町村の歴史であります。

明治二十二年、近代国家を目指した政府は、小さな集落を維持しつつ、市町村という制度を導入しました。それから五十年の時を経て、昭和二十八年頃に大きな合併がありました。それからまた五十年の時を経て平成の大合併によって、また市町村という仕組みが変わりました。

遠野も明治の合併におきまして、一町七カ村がそれぞれ町村として成り立ちました。その後、五十年を経て、昭和の合併の時に一町七カ村が合併して遠野市が誕生しました。そして、もう一方では、鱒沢村、達曾部村、そして宮守村という三つの村が合併して、宮守村という村が誕生し、遠野郷は遠野市と宮守村の一市一村となりました。この一市一村がまた五十年後に平成の大合併を迎え、「これじゃ人口減少にとても耐えられない。なんとかまた合併しましよ」ということで一市一村が平成十七年十月一日に対等合併して「新・遠野市」が誕生したわけです。「新・合併をした時に私は言いました。「柳田先生が遠野を訪れた百年前、遠野郷は一町十カ村だった。それが百年の時を経て人口も減り、情報通



信網も道路網も飛躍的に構築されてきた。このままでは宮守村も遠野市もなかなか前に進まないだろう。数合わせの合併ではないんだ。一町十カ村というひとつの遠野郷としてこれまでも地域づくりを進めてきたんだ。その百年前の姿に戻るといふ形の地域づくりがあってもいいんじゃないか」

そうして、宮守村に合併を申し入れて、対等合併というひとつの選択肢のなかで、新・遠野市を誕生させるというボタンを押したわけであります。

「市長、あなた何を考えているんだ。こっちは市だぞ。あつちは村じゃないか。対等合併することはないだろう。やったとしても吸収合併なんだ」という市民の皆様の抗議もありました。

それはそうかもしれませんが。しかし、村は村として五十年、百年の歴史がある。遠野市も同様です。それが次の五十年、百年先の新しいまちづくりを行うとなれば、お互い対等の立場で進めるということがあってもいいのではないのでしょうか。村だから市だからといったって、仕組みは同じです。村長がいて、議会があって、そして職員がいて成り立って

いる仕組みは同じです。従って、対等合併です。

「市長、そんな事すれば今度は失職するんだぞ。それでもいいののか」という話がありました。私は市長としての仕事をそのまま続けたいという気持ちだけで、まちづくり・地域づくりは行いません。新たな地域づくりを行うスタートだから、そのためには改めて新・遠野市の首長としても一度選挙をやって挑戦させていただけですか？という選択肢もあってもいいのではないのでしょうか。

「やつぱり、ばかだなあ」とまで言われました。「何故、自らの市長という職を捨ててしまうのか？吸収合併にすれば、あなたはそのまま市長でいられるんだ」という話もされました。

確かにその通りかもしれませんが。しかし、そのような名誉だとか地位だとかを考えて合併するというものではないと思います。私は対等合併を行い、そして失職して、選挙を経て新たに新・遠野市のまちづくりを取り組むことになりました。

遠野郷一町十カ村をひとつの単位として新たなまちづくりを行う。人口減少がどうした、それがなんだ、それに向かって挑戦するという気合

いの中で、新しい遠野市をつくっていかなければなりません。

柳田先生は言っています。「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」地方頑張れと言っているじゃないですか。ですから、我々が頑張らないでいっただいどうするんだ、という気持ちです。

あれも大変だ、これも大変だ、おねだりばかりしては何もなりません。我々には藩政時代から、明治、大正、昭和、平成という時代にあっても、強かに様々なことに挑戦してきたという遠野の歴史があります。

私は、ある方からこのようなことを言われました。「合併は単なる数合わせじゃないぞ、市長。『場の力』を大事にしろよ。『場の力』とは、自然の力、伝統の力、歴史の力、そして、もう一つ文化の力だ。自然、伝統、歴史、文化、これをきちんと踏まえたまちづくりを行うことが大事なんだ」

この平成の大合併は何だったんだろう。数合わせの合併だったのではなかったのかということ全国至る所で聞かれます。やはりこの「場の力」をどのように生かしていくか、この人口減少時代を強かに生き残るためにも住民の力を信じて自らのあ

るべき姿というのを見出して行くんだ、ということも大事なことでないかと思つているところであります。このような、人と人との繋がりが、そして地域と地域の絆を高度経済成長以降いつの間にか我々は忘れてしまつていのではないだろうかと思つていたわけでありました。

そして、忘れてはならない東日本大震災。平成二十三年三月十一日、午後二時四十六分、大変な災害が起きました。今、岩手県では、四年目の冬に入ろうとしているわけであります。三万人以上の方が、未だに仮設住宅に住まざるを得ない。その他千百名を超える方が、身内の元にも家族の元にも戻れない行方不明者なんです。

そういつた中で遠野市は、沿岸と内陸の交流の拠点として果たすべき役割がある。遠野には海がない。従って津波は来ない。だから関係ないじゃないんです。遠野だからこそ果たす役割があります。助かった命、これをどのように繋いでいくか、そのために遠野が果たす役割があるんじゃないかということ、後方支援活動を行ったわけでありました。

被災地ではお米が無くなりました。おにぎり一個を三人で分けて食べた



という状況で、十四万食のおにぎり  
を遠野市民が必死になつて握つて、  
被災地に届けました。とにかく、あ  
りとあらゆる物を持って行き、もし  
て被災地の皆様に救援の手を差し伸  
べたわけでありませう。

その中では、福崎町の皆様からも、  
本心に心温まる救援物資を遠野市に  
寄せていただきました。ダンボール  
に綺麗に仕分けされた衣類を届けて  
いただきました。まさに福崎町の皆  
様の心根といったものが、私どもに  
届いたわけでありませう。それを沿岸  
被災地の皆様に頑張つて欲しいとい  
う思いと共に確実にお届けしました。  
このような全国の市町村の仲間  
による水平連携というひとつの仕組  
みによって、一瞬にして家族や住居を  
失い、どこにその怒りをぶつけてい  
いのか分からない被災者の方々に、  
元氣と勇氣を与えることができました。

国や県が何もしてくれないと嘆く  
のではなく、市町村同士がお互い連  
携をし、必要な物資をどんどん、被  
災地や遠野市に寄せていただいた。  
遠野市に救援物資を送ってくれた全  
国の仲間は、百近い市町村がありま  
した。遠野は、それらを間違い無く  
被災地に届けたわけでありませう。

その中で私は、「思いは見えない  
けれども思いやりは見える、心は見  
えないけれども、心遣いは、心配り  
は見える」という、東日本大震災当  
時よくテレビCMで出てきた言葉を  
思い出すわけでありませう。

やはり、この思いやり、心遣いと  
いったようなものが如何に大切なも  
のなのか、この東日本大震災で私は  
非常にショックなことがありました。  
有名な全国紙の若手の記者がこうい  
うことを言ったのです。

「市長さん、遠野市の方々は、海  
もなく津波も来ないので何故こん  
な一生懸命になつて、被災地の皆様  
に向き合っているんですか？」そこ  
まではよかつたんです。その次に  
出てきた言葉は、「何か得になるん  
ですか？」という言葉だったんです。  
私は耳を疑いました。つい我を忘れ  
て、「あなたたちよつとここに座りな  
さい」と言つて座らせて、彼に言  
いました。

「今、我々が、この助かつた命、  
頑張りたい！という気持ちを何とか  
して支援していくのが、人としての  
務めじゃないでしょうか？他の市町  
村のことなんだから、国や県から何  
か指示があればやるんだ、と座して  
待っているわけにはいかないんだ。

生死を分ける状況を目の前にして、  
国や県から何か指示があつてから、  
というわけにはいかないんですよ。  
得とか損とかじゃないんですよ。あ  
なたは、どうして、損するからやら  
ない、得するからやるというよう  
な考え方をするんですか？あなたは、  
考え方が間違つていますよ」という  
話を約一時間説教し、理解してもら  
いました。

戦後という時代の中で、我々が  
つの間にか、これは得をするある  
いは損をするという価値判断で命とい  
うものと向き合うようになっていた  
のかなあということを感じました。  
しかし、東日本大震災によつて、そ  
うじゃないぞ、みんな仲間だ、家族  
だ、そして地域なんだ、ということ  
を私は再認識いたしました。  
そして、これからの地域づくりは、  
まさにそのような人と人との繋が  
りを大事にして、市町村間も水平連  
携して、それぞれ補い合いながら、強  
かに生き残る、活力を見出していく  
という時代になつたのではないのか  
と思つているところでございます。

福崎町とは柳田國男先生との繋が  
りから、福崎町の皆様との絆を更  
に強めて、遠野市は元氣を出して  
いきたくと思ひます。

先ほど、商工会の女性部の方から  
言われました。「今度の十一月の末  
にはイベントがあつて、そこで得た  
義援金を、被災地の方々に届けて  
よ」と。そういう仲間が増えること  
は嬉しいことです。私は遠野に帰  
りましたら、遠野の皆さんに、被災  
地の皆さんに、福崎町の皆様の思  
いを伝えながら、「大変だろうけれど  
も、頑張ろうよ、全国の仲間が  
みんな心配して、頑張れと言つて  
いるぞ」といったことを伝えるのも、  
ひとつの役目ではないかと考えて  
います。

最後に「遠野スタイル」という  
のは、おねだりはない、そして、果  
敢に挑戦をする、という中から、可  
能性を少しでも引き出す、あるいは  
引きずり込む、そのような姿勢を  
意味します。それは、自然、歴史、  
文化、風土、といったものから、  
すくいあげられる「場の力」であ  
る、ということを、繰り返しであり  
ますけれども、申し上げまして、  
私の話は終わらせていただきます。





# 神積寺の歴史と縁起

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター

学術研究員 井上 舞



## はじめにー柳田國男と神積寺

福崎が生んだ民俗学者柳田國男は、『故郷七十年』の中で、繰り返し福崎についての思い出を語っている。

その中で柳田が、「子供にとっては、その行事はいちばん大きい興奮で、今もよく憶えている」と語っているのが、現在も続く神積寺の伝統行事「鬼追い」である。柳田が見た鬼追いと現在の鬼追いの間には、時代を経て若干の変化が生じているかも知れない。とはいえ、「いちばん大きい興奮」と言うからには、かつても山の神と二匹の鬼が松明を振りかざし、参拝客の間を縫って境内を舞い踊ったのではないだろうか。そして、その勇壮な様は、少年時代の柳田國男に強い印象を残したに違いない。

また、柳田の実家である松岡家は、

もともと神積寺の檀家であった。しかし、さまざまな事情があつて、いったんは檀家の縁を切られていたようである。その後、松岡の一族は関東に移り住んだものの、先祖の墓そのまま福崎に残されていた。そこで、柳田の考えもあつて、先祖の墓を神積寺内の悟真院に合祀し、その世話を三木家に頼んだと、これもまた『故郷七十年』に残る話である。

この神積寺。本尊の薬師如来は、日頃は秘仏とされ、六十年に一度だけ、ご開帳が行われる。柳田が辻川で暮らしていた時期には、ご開帳は行われていない。とはいえ、周囲の人々から、ご開帳の折の話ぐらひは聞いたことがあつただろう。もし、柳田がご開帳に巡り会つていたら、あるいは『故郷七十年』にもうひとつ、福崎にかんするエピソードが加わっていたのだろうか。

さて、平成二十六年は、まさにご開帳の年であつた。期間中は、ご開

帳にともなう各種法要のほか、さまざまなイベントが催されていた。特に、現代アートとのコラボレーションは、これまでのご開帳にはない、新しい試みであつたといえよう。かくいう私も、薬師如来を拝観するために神積寺を訪れ、趣のある建物や庭の内に配された絵画やオブジェに驚かされながら、境内の散歩を楽しんだ一人である。

私と本尊薬師如来との結縁譚は、後で話すこととして、本題に移ろう。本稿の目的は、神積寺がどのような歴史をたどってきたかについて紹介することにある。とはいえ、この場で一千年の長きにわたる同寺の歴史を語り尽くすことは難しい。よって、ここでは中世という時代に焦点をあて、いくつかの資料を取り上げながら、その歴史の一端をひもといてみたい。

## 一 神積寺の歴史

### (1) 古代の神積寺

神積寺の縁起によれば、同寺の開創は正暦二年(九九一)とされる。ただ、これにかんする傍証資料は現在のところ確認されていない。神積寺の名前が確認できる最も古い資料は、保延四年(一一三八)のものに

なる。播磨国の在庁官人(国衙の役人)桑原貞助によって催された、写経事業の参加僧に「妙徳寺僧玄真」の名が見えるのが、それである。ここには「妙徳寺」とあるが、現在呼びならわされている「妙徳山神積寺」の寺名が見えるのは、実は近世に入ってからのこと。それ以前は「妙徳寺」の名が用いられていたようである。もっとも、本稿では混乱を避けるため、資料を引用するとき以外は「神積寺」の呼称を用いておく。

桑原貞助が催した写経事業は、数多くの僧に参加を呼びかけ、大般若経全六百巻を一日で写経するという、壮大な事業であつた。現在、書写された経典は、一部しか残っていないが、そこに記されていた寺院を分析した研究によれば、写経に参加した僧の所属寺院は、その多くが桑原氏の勢力圏内にあつたことが指摘されている。

ところで、この写経事業が行われたころ、神積寺がある田原地域は、中央の貴族である源師行の所領となつていた。それを示す資料が、保延七年(一一四一)に発給された「鳥羽院序下文」という文書である。この文書によれば、もともと田原地域は、播磨国大掾伊和豊忠の一族が代々



受け継いできた土地であった。それが、永祚元年（九八九）に、豊忠の外孫である桑原為成に譲られ、さらに幾人かの相伝を経て、大治三年（一一二八）に源師行の手に渡ることになったという。

この文書に見える桑原為成と、写経事業を行った桑原貞助との間には、およそ百五十年の時代の開きがあるが、同族と見られている。伊和豊忠から桑原為成に土地が譲られて以降、この地が桑原氏に代々受け継がれてきたのか、あるいは伊和氏の手に戻ったのかについては、諸説あつて定かではない。ただ、先にも述べたように、桑原貞助の写経事業に神積寺が参加していることを考えれば、桑原氏は何らかの形で田原の地と関係を持っていたのだろう。そして、神積寺もまた桑原氏の庇護を受けており、そのために神積寺の僧が写経事業に参加したのだとすれば、神積寺の創建は、伊和氏や桑原氏が田原の地を支配していた頃にまでさかのぼれるのではないだろうか。

は田原荘内の寺院として存在することになるのである。

## （2）田原荘と神積寺

さて、保延七年に田原の地は鳥羽院の荘園となった。その後、荘園領主は何度か変遷し、鎌倉時代になると、九条家領として資料に登場する。九条家は中央の名門貴族で、田原荘の他にも多くの荘園を持っていた。同家には、こうした荘園にかんする文書が多く残っている。そのうちの一通。正応四年（一二九二）の「田原荘実検注進状」は、荘内における神積寺の立ち位置を知ることのできる好史料である。

同文書は、田原荘の検地記録である。ここには、当時の田原荘が保有する田地の総数のほか、除田や定田の内訳が記されている。その詳細については、『福崎町史』で子細に検討されているのでそちらに譲る。本稿では、神積寺にかんする箇所のみを確認しておきたい。

「田原荘実検注進状」によれば、当時田原荘が保有していた田地は、二百五町六反三十二代。そのうち、年貢や公事などが賦課されない「除田」が、九十三町三十三代あった。なお、通常、荘園や荘園内の寺社を運営する経費は、この除田の収入か

らまかなわれていた。この除田分のうち、寺社の経営や荘内で行われる宗教行事のために充てられているのが、二十四町七反五十三代。そのうちの半分近く、十一町四反三十七代が神積寺分の除田となっている。ちなみに、これに次ぐのが「西光寺」

の三町。その次が「与位社」の一町であることを考えると、神積寺が、荘内の他の寺社に比べて、圧倒的に広い除田を設定されていることがわかる。さらに、他の寺社については、寺社の名前と除田数のみが並ぶだけだが、神積寺にかんしては、寺院そのものの経営分のほか、寺院内で催される大般若会や仁王講、来迎会などの各種法会を営むための除田、堂舎の修理のための除田など、細かな内訳が設定されている。

つまり、神積寺のように、多くの除田を認められていれば、それだけ安定した経営を行うことができたのである。これは、言い換えれば、田原荘が神積寺を保護すべき重要な対象としてみなしていたことを示す。

また、南北朝期の播磨で成立した『峯相記』によれば、神積寺は書写山・増位山・法華山・八徳山・普光寺とともに、国衛が主催する鎮護国家の祈禱を行っていたという。このよう

に、播磨国内においても重要な役割を担わされていた寺院であることも、荘園内における神積寺の立場を有利にする方向に働いたはずである。

ちなみに、このち田原荘は、戦国時代の混乱の中で荘園が有名無実化するまで、九条家領として在り続けた。残された資料をみる限りは、神積寺と田原荘は、時折相論があつたものの、穏やかな関係が続けていたようである。中世という時代は、荘園領主の盛衰によって、荘園内の寺社の行く末が左右される時代でもあつた。そうした時代の中で、九条家という安定した領主を得、かつその保護を受けられたことが、神積寺が今に歴史を繋ぐことのできた理由の一つといえるだろう。

## 二、神積寺の縁起

### （1）縁起から見えるもの

ここまで、古代から中世にかけての資料上にみえる神積寺の姿を追ってきたが、もうひとつ、同寺の歴史を考える上で重要な資料をみてみたい。神積寺の縁起である。縁起とは、寺院や神社の創建の由来を記したものである。一般に、その内容には史実と虚実とが入り交じったものが多い。よって、そこに書かれた内容を全て「史実」と受け取ることはでき



ない。とはいえ、中世にあっては、寺社が自ら、人々の信仰を集め、寄進を募り、堂舎を維持していく必要があった。先に述べたように、神積寺は九条家領内で他の寺社に比べて破格の待遇を受けていた。しかし、それは莊園側が一方的に神積寺に信仰を寄せたのではなく、神積寺の側が信仰を寄せられるために努力した結果なのである。そして、信仰を得るための重要なアイテムの一つが、寺社の靈験・利益を喧伝する「縁起」だったのである。これを念頭におきつつ、以下、神積寺の縁起を読み解いてみたい。

## (2) 慶芳内供について

資料上から確認できる神積寺の縁起のうち、もっとも古いものは、先述の『峯相記』に残されている。まずは、その本文を見てみよう。

次妙徳寺者、大納言範卿ノ息、慶芳内供最初ノ建立、一条・三条両帝ノ御願所也、彼内供、西国巡礼ノ次、正暦二年三月八日、当国田原ノ庄有井村ニ一宿、夢ノ内ニ貴僧一人出来リ、枕ニ立テ告ケテ云、此東ノ山下ハ弘法繁昌ノ地、四神相応ノ御ナルヘシ、汝ヲ待テ今ニ興セス、早ク寺ヲ立テ、薬師如来ヲ安置スヘシ、

我ハ是薬師如来ノ応化妙徳菩薩也云々、靈夢ニ驚テ尋見ルニ、実ニ殊勝ノ靈地也、仍伽藍ヲ建立ス、(後略)

大納言範卿の子息である慶芳内供が、西国巡礼の折、播磨国田原荘有井村に一宿したところ、夢の中に貴僧が現れ、枕元に立って告げたことには、「この東の山の下は弘法繁昌の地、四神相応の場所である。おまえを待って、今まで事を起こさずにいた。早く寺院を建立し、薬師如来を安置しなさい。私は、薬師如来が応化した、妙徳菩薩である。」慶芳は靈夢に驚き、かの地を尋ねてみると、確かに優れた靈地であった。そこでこの地に伽藍を建立した。という内容である。このあと縁起には、範卿の妻妾が一条・三条両天皇の乳母であったために、同寺が天皇の御願寺となったこと、両天皇の寄進により、境内に多宝塔と常行堂が建立されたこと、三条天皇の七宮である覚照阿闍梨が慶芳の弟子として、寺務を執り行い、堂舎を整備したことなどが記されている。

この縁起に登場する人物については、すでに『福崎町史』でも指摘されているように、資料上からその実在を確認することができない。とは

いえ、神積寺が人々の信仰を得るためにこの縁起を作ったのだとすれば、その内容には何らかの意味があるはずである。それを読み解く一つの指標となるのが、開創者の慶芳内供ではないだろうか。

慶芳内供については、鎌倉時代に九条家から出た僧、慶政をモデルにしたとみる向きもある。慶政は、当時の九条家当主であり、弟でもある道家との連携のもと、中世前期の文化形成に影響を与えた人物であることが、近年の研究から明らかになりつつある。また、寛喜元年(一二二九)には、書写山を訪れ、常行堂修造供養の導師を勤めており、播磨と全く無関係の人物でもない。確かに、九条家領内に位置する神積寺にしてみれば、慶政をモデルとした縁起を作ることによって、同家からいっその尊崇を得ることができるとも思えない。とはいえ、今のところ慶政と慶芳を繋ぐ糸は「慶」の一字のみである。この問題については、今少し検討が必要のように思われる。

開創者の問題に即してみるならば、慶芳は「内供」であった。むしろ、本稿ではこの役職に注目してみたい。内供とは、宮中に伺候して御齋会の読師などを務めた僧侶のことである。

中世においては、名譽職の側面が強いが、かつては天台宗の開祖である最澄や、その後の天台宗の発展に寄与した円仁など、名だたる名僧が任じられていた。また、内供がかかわる御齋会とは、宮中において金光明最勝王経を講じ、国の安泰と五穀豊穡を祈願する法会である。この法会は、朝廷にとって重要な行事のひとつであった。

神積寺の縁起のなかで、妙徳菩薩は慶芳内供がこの地を訪れるのを待って、今まで事を起こさなかったのだと告げた。妙徳菩薩が慶芳のもとに現れた目的のひとつは、縁起にもあるように、自らの本来の姿である薬師如来を祀らせることにあっただろう。さらに、内供を開創者として指名するからには、この「弘法繁昌ノ地」で、宮中と同様に鎮護国家の法会を執り行わせようという意図が隠れていたのではないだろうか。

先の、「田原荘実検注進状」によれば、実際に神積寺では大般若経会や仁王講などの鎮護国家にかかわる法会が行われていたことがわかる。また『峯相記』にも、神積寺を含む六箇寺が「国衙ノ最勝王経講讚・仁王会」に参加していたことが知られる。中央の有力貴族、つまり政治の



中心にかかわっていた九条家にとつても、こうした法会を執り行う寺院は、積極的に庇護の対象となつただろう。

慶芳内供による開創という縁起の記述には、国衙に対して、あるいは九条家に対して、自らが鎮護国家の祈禱を行うにふさわしい寺院であることを主張していたのである。

### (3) 出合いの場としての辻川

もうひとつ、神積寺の縁起のなかで注意しておきたいのは、慶芳内供が夢告を受けた場所である。今いちど縁起の該当箇所を確認すると、慶芳内供は西国巡礼の折に、田原荘有井村に一宿し、その夜の夢で「妙徳菩薩」から寺院を建立するよう告げられたという。かつて夢は、神仏と交接するための重要な回路と考えられていた。だから、夢中でお告げを受けたこと自体は、そう不思議な話ではない。問題は「有井村」のほうである。有井村の名は、現在には残っていない。ただ、辻川に在井堂という小堂があることから、おそらく辻川附近にあった村名と考えられている。

辻川は、北条から山崎へと抜ける東西の交通路と、姫路から但馬方面へと抜ける南北の交通路が交差する、

文字通り「辻」である。そして、こうした道と道とが交差する場所は、実際に交通の要衝であったばかりでなく、呪術的な性格も持ちあわせていた。具体的には、異界との接点、神霊が集まる場所と観念されていたのである。後世の伝承になるが、近世の地誌『播磨鑑』には、同じく辻川にある鈴の森にかんする伝承が残っている。播磨一宮の伊和大明神が居所を移そうとした際、播磨中の神々がその手伝いのために鈴の森に集まったというのである。この伝承もまた、辻川の「辻」的性格の一端を示すものといえよう。この場所で、まさに慶芳と妙徳菩薩との邂逅が行われたのである。慶芳が有井村（＝辻川）に宿泊したという設定は、単にそこが交通の要衝であったからではない。「辻」を有する有井村こそが、人と仏が出会うのに相応しい場所だったのである。

出合いといえは、辻川で生まれ育った柳田國男は、辻川を通り過ぎる数多の人々との出合いが、今の自分を作つたと述懐している。交通の要衝として現実の人と出合い、異界との接点として仏と出会う。今も昔も辻川は（出合いの場）だったのである。先の開創伝承は、国衙や九条家

への主張という側面が強かった。しかし一方で、縁起は有井村という、外部にとつてはローカルな場所を出合いの場として設定した。そうした意味では、神積寺の縁起は確かに福崎の地に根付いて生まれたのである。

### おわりに

平成二十六年十一月某日。抜けるような青空が広がり、涼やかな秋風に五色の幡がたなびく昼下がりのこと。私は妙徳山神積寺を訪れた。六十年に一度の機会。本尊薬師如来坐像を拝観するためである。平日ながら、境内には本尊に結縁しようと、数多の人々が集っていた。参道にある現代アートの案内看板に心を惹かれつつも、まずは本堂へ。護摩木を燃す煙に包まれながら、本堂に安置された前立仏の薬師如来像や、かつて岩尾神社に祀られていたという文殊菩薩を拝観する。そして、本堂を出たのち、木々に囲まれた小道を通り抜け、本尊が安置されている宝蔵庫へと向かう。

写真資料では何度か見たことがあるが、実物を見るのは初めてのこと。開け放たれた扉から中をのぞき込む。そこには、優しい顔をした仏の姿があった。ふつくらとした体躯。静か

に人を見下ろす切れ長の目。その表情は少し微笑んでいるようにも見えた。そして、僅かに前方に曲げられた、右手の薬指。左手に持つ薬壺から霊薬を塗ってくれるというその指は、今にも動き出しそうな柔らかさで、こちらに差し向けられていた。

手を合わせた後も、立ち去りがたく、しばしその場にたたずむ。次にこの薬師如来に会えるのは六十年後。これが最後になるのだろうか。それとも、今一度会う機会があるのだろうか。六十年後の自分の年齢を考えると、可能性はなきにしもあらず、だ。薬師如来は病苦を救う現世利益の仏という。どうかもう一度会えますように、と頭を垂れた。

### 【参考文献】

- 『福崎町史』第一巻／小林基伸「播磨国在庁官人桑原貞助発願一日頓写大般若経」（『わたりやぐら』4号、一九八七）／苺米一志「中世初期の国衙と寺院」（『就実大学史学論集』22号、二〇〇七）／近本謙介「慈円から慶政へ―九条家の信仰と文学における継承と展開」（『中世文学研究は日本文化を解明できるか』二〇〇六）／拙稿「中世田原荘の寺社について」（『福崎町連携事業平成22年度活動報告書』二〇一一）



# 快進撃の河童『河次郎』誕生秘話

福崎町地域振興課 小川 知男

「小川さん、あなたそういうの好きでしょう。よろしく。」

「は？・・・はい」

平成二十五年に新しく出来た部署「地域振興課」へ異動辞令をもらってすぐの四月三日のこと。目の前にある福崎町独自の補助金『自律(立)のまちづくり交付金』の準備に追われながら一日の業務を終えてタイムカードを押そうとしていたところで町長に捕獲され、

「そうそう小川さん、辻川山公園にため池があるでしょう」  
「はい、ありますね」  
「あの池はいろんなことを試してみただが、一向に水がきれいにならない」

「はい」  
「そこでだね、それを逆手にとって河童を池から出せないかなと考えているんです」  
「ほほう、それは面白いですね」

「小川さん、あなたそういうの好きでしょう。よろしく」

「は？・・・はい」

確かに嗜む程度に造形はやっておりましたが、そんな福崎町の辻川山公園に設置するような大それたものを私が造っているのか、いや、造れるのかと。私が造るよりも偉い彫刻家の大先生になんか凄いモニュメントこしらえてもらって、これは過去と未来の人類の英知を表現しておりましたーみたいなことで丸く収めてもらった方が良いのではなんてことを考える始末でして、帰宅する車の中では町長の言葉がぐるぐるぐるぐる、

「河童？町長本気やるか」  
と車のハンドル相手にブツブツ申し上げるわけです。

そもそも河童などというものはいろんな説が全国に存在いたしますが、実態があるわけではない。造形するにあたってモデルはある方が良くわ

けで、家に帰ってから腕を組み、粘土の塊を前にしてうんうん唸り、さてどうしたものかと小一時間。

真つ先に浮かんでくるのは福崎町のキャラクター、河童のフクちゃんサキちゃんでしたが、はたしてあの二体を池から出して訪問される方の反応はどうだろう。同じ造るのであれば、出来るだけ多くの人を集めたい。フクちゃんサキちゃんでも悪くはないが、少々パワー不足感があるような感じがする。

いまやどこの市町村でもゆるキャラが存在する中、その期待を裏切り、あえてむちゃむちゃ気持ち悪いものを造ればどうだろうと思いついた午前二時。

きつとこの話を私に託した町長の脳内では十中八九フクちゃんサキちゃんが池から現れ、手をつないだ家族連れがほほえましく笑う姿が映っているのであると思われけれども、きつと怖くて気持ち悪い方が人は話題にするだろうと思ったわけです。

難しい心理学などは分かりませんが、人間はなぜか「怖いモノ見たさ」という感情を装備しておるようございまして、実際私も同じ。お化けは怖いけどちょっとだけ見てみたい。じゃあ決まった、気持ち悪い河童で

行くぞ、もう止めたって遅いんだから！そう決めた瞬間から作業はフル回転。NSPという造形用の粘土で自分勝手に「河童ってこんな感じだよ、多分そうだよ」と想像しながら二時間くらいでざっくり形を決めました。

尻子玉を持って岩の上に座る河童。いいじゃないか。この日本全国を席卷する勢いのゆるキャラ人気に宣戦布告だこのやろうと思いい残すことなくぐっすり眠れたわけです。



当初の河童のラフ造形

で、翌日「えー、これで行くことと思います」と職場に持って行きましたところ、  
「え？なにこれ？」



「こんなん置くの?」

「バカも休み休み言っつてずっと休め」

と、それはもうある程度の予想はしておいたものの、マグナム級の台風がご到着のような、はるかに予想枠を超えた反対意見の暴風警報。

当然のように皆、池から出て来るのはゆるキャラだと思っていたように、五四〇度あさつての方向を向いた私の造形には眉をひそめてしまわれ、さすがの私もひよつとしてミスジャッジしてしまつたかと、熱いソウルも軽くブレてしまいそうに。

でもきつと考え方は間違っていない、重要なのはハートだハート。つまらない顔色伺いや萎縮で自分の創造性を曲げちゃだめだと自分自身に言い聞かせ、絶賛「気持ち悪いコール」開催中のところ耐え難きを耐えて話を前に進めたわけです。

最終的にデザインには首をかしげられながらも、町長まで決裁をいただき、具体的にGOのサインが出たわけですが、正直なところ何から手を付けたら良いものか分からないんです。造形自体は出来たものの、じゃあここから先、一体何から始めたらいいのか。町の登録業者一覽を開いて見ましても「河童を池から出したり沈めたりする業者」のインデ

ックスはどこにも貼って無い。誰かが道を造っていてくれれば、そこを歩けば良いだけの話で、スキップしようがトボトボ行こうが自分次第というところですが、これは何よ、道造るところから始めなきゃだめじゃん」と目の前に広がる広大な大地を見て立ちすくんだわけです。

しかしまあとりあえず何かしらアクションを起こさないといけないと色々教えていただいているプロ造形師の先生に連絡をとってみたんですね。先生はかつてゴジラの映画のセットや、お化け屋敷のお化けを造ったりしていた方で、そちら方面の情報も得られるであろうと。そうしましたら造形屋というものがあるので、探してみると良いとのこと。「造形屋、造形屋」とうわごとのようにつぶやきながらインターネットで検索すること小一時間。ようやく見つけた造形屋。なんと兵庫県のマスコット「はばタン」も造っている実績あり。接触するしかないとお電話差し上げたわけです。

「もしもし、兵庫県の福崎町です、河童を池から出そうとしてまして」  
「・・・フツッw」

まあ大体そんなもんでございます。漏れなくコイツ何言っつてんの?みた

いなご反応。詳しくお話ししてありますと、造形屋さんもそのうち「何だと、それおもしろそうじゃないの」と乗り気なご様子でして、その後お店の方へ河童の原型を持って伺いたしますと、「実に楽しそうなお話だ、是非やらせていただきたい」とご快諾いただいたわけです。

これで造形屋さんは大丈夫、しかし池から河童を出す装置はどこにお願いすればいいか。知り合いに聞いてみても帰ってくる言葉は「無理」の一言。右も左も「無理」「無理」「無理」。いよいよこの話も頓挫してしまうのかと希望の扉を閉じかけた時、現れてくれました。おお神よ。電気製品工場などで動く生産ロボットを造っていらっしゃる会社でして、「今はすぐに思い浮かばないけれど、みんな考えてみましょう」なんて言われて涙チョロリ。こうして福崎町の河童製作特別実行部隊は結成されたわけです。

さて実行部隊結成後、真っ先に直面した問題は、河童を「水の中で動かす」という部分。陸上での動作であれば難なく解決できる方法が、水の中という制限があることによって様々な方法が使えなくなってしまうんですね。

まず錆びるということ、次にいつでも好きな時に部品の取り換えなどのメンテナンスが出来ないということ。つまり設置したら少なくとも半年はそのまま放置していても機嫌よくシユンシユン可動しなければならぬですね。

はたしてそんなことできるんだろうかとみんなで頭を突き合わせて腐ったキャベツのように唸るわけです。しかしあの某千葉のデイズニードや某大阪のUSJはそんな装置を、まるで息をするかのように、いとも簡単に水中で動かしているのですから、絶対方法はあるはず。しかしそれは門外不出、こちらはこちらで少ない知恵を寄せ合せてふざけながらも傑作をひねりあげないといけない。そして最初に提案されたのが、漁師さんが使っている網を巻き上げるウインチでワイヤーを巻き上げて動かしてはどうかという案。いいじゃないですか、予算はいくらくらいですか?

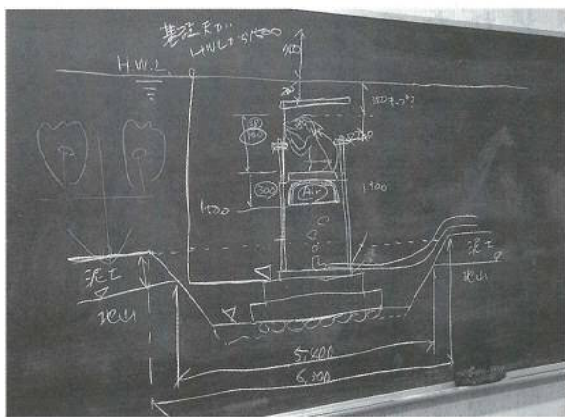
「ごひやくまんくらいです」  
「無理っす!」

正直申し上げまして、この装置が当たるかどうか分からない、全く初めての試みで、かつそういう大手エンターテイメント企業ではなく人



口二万人弱の自治体がやっているわけです。新規事業で何のフォローもバックアップも無い中で、いきなり五〇〇万円の投資は大きすぎる。あまりにも危険。血税の投入であることを忘れてはいけません。

だめ、もっと安い方法で。二〇〇万くらいにおさえられる方法で！とまたウンウン唸るわけです。結局一週間程度経過したころ、一つの案が出まして、河童を大きな洗面器を裏返したようなものに乗せて、空気を送り込んだらどうだろうと。洗面器には小さな穴を複数開けておいて浮いた後は小さな穴から空気は抜けていき、後は自重で沈んでいく方法だと相当安く上がるんじゃないかと。



スタッフで議論中の黒板

全員両手挙げて喜びまして、これならいける、これなら大丈夫だ、と倒産寸前のわが社に大きな融資が決まったかのように、まさに腐ったキヤベツのリニューアル。

方式も決まったところで細かなサイズの打ち合わせや、部品の選定、また河童のデイトールをどうするかなどの話し合いが始まったわけですが、河童の塗装については絶対には緑だけは避けてくださいと申し上げました。みんなが想像する河童には絶対にしたくなかったんですね。予想通りのものが出てきたとしても、見る側の期待はシンナーのように揮発性が高く、あつという間に飽きられてしまいますから、良い意味で予想を裏切り続けていかないと人を呼ぶことは出来ないと思っただけです。

ついでに申し上げますと、見る側を飽きさせないもう一つの方法として、出しっぱなしにしない、出してもすぐに沈めるというのがあります。もともと当初の予定では一日に三回、一瞬しか出さず、見れたらラッキーという計画でした。出没时间が短いという方法はそれはもう大変不評ですけども、早すぎるじゃないかといっぱい怒って帰りはったお客さん

が、翌日また来てカメラ構えてたりとか見かけますと、作戦は成功、ニヤリとしてしまう瞬間でございます。話は戻りますが、造形の仕上げについては我がままを通させてもらったんです。表面はベコベコしていて、色は映画のプレデターのような感じで、ページジュをベースとしてオレンジとブラックを入れてください、髪の毛は一体型造形ではなく、必ず毛を植える方法をとってくださいなど。

髪の毛については散々揉めまして、いや、何を揉めたかという造形屋さんや、何をやりたくないかという話ではなく、素材をどうするかでして。水中にずっと沈んでいるものに取り付ける髪の毛ですから、耐久性のある素材が見つからなかったんですね。普通に売ってるカッターではエブリデイの水中生活に耐えきれず、千切れ

てポロポロになってしまうんですよ。これには造形屋さんも随分悩まれたようですが、最終的にこれで行くかとなったのが、黄色と黒のトラロープってやつでして、あれを頑張っただけで黒い部分のみを使って植えているんです。おかげで水中に沈んだ瞬間ふわっと広がって気持ち悪さ演出の一つとなっているんですね。



工場で植毛中の河童

ある程度造形の形が出来上がったところで機械屋さんのほうも装置が組みあがりましてとのこと、これが年末でした。四月から準備を始めて実に九か月、いよいよ動作テストをやりましょうという事になったんですけども、正しくテストするには装置を底のフラットな水の溜まった場所に設置して行う必要があります、当初小学校のプールを借りてテストをやるうなんて話になってたんですね。小学校からも了解を得て、どうもすみません、ありがとうございませうなんて御礼を言ったのはいいけれど、年明けの小雪舞う一月に誰がプールに入るのん。

「寒いってレベルじゃないよね、痛いよね、死ぬかも知れんよね」



「俺血圧高いから一番危ないですわ」  
 「ウエットスーツ着たらどうかな」  
 「ウエットスーツはしみこんでくるからドライスーツならどうかな」  
 「いくらするの？」

「八万円くらい」

「無理だつてー」

「ハァー・・・」

稼働実験の前にまたしても壁登場。

じゃあどうする、何がある、とまた全員ですったもんだとご相談、プールサイドで火を焚いておけばとか、造形屋さんが近所の銭湯の湯船借りれるとか、めちゃくちゃな案が飛び出す中、結局、機械屋さんの工場で河童が装置ごと入る水槽を造って沈めようという話にまとまりました。当然機械屋さんは予期せぬ出費にげっさりしてらっしゃいましたが、もう時間も残り少ない中躊躇している余裕もなくやるしかないわけです。

年明けに水槽が出来ましたというご連絡を受けまして、新年のご挨拶も兼ねて造形屋さんと伺いますと、それは立派な鉄板で出来た水槽が置いてありまして「中に水を入れるために水道の蛇口を開けっ放しにして買物に行つて帰ってきたら溢れてました」とビショビショの床をモップで拭いている機械屋さんの姿。い

やあいものをこしらえてくださいましたねとみんな大喜びなわけです。河童の像を装置に接合し、天井から機械で釣つて水槽に沈めますと、当たり前ですがきれいに収まり、河童はゴボゴボと水中へ沈んでくれました。いよいよ空気をコンプレッサーで送り込んで動作チェックです。スイッチオン。



機械工場でのテストの様子

バンバラバンバンとコンプレッサーは回り、空気が水槽下部に送られ、水面が大きく泡立ち、河童が・・・河童が・・・

あれ？河童は？  
 浮いて来ませんわ。いきなりのトラブル発生。浮いて沈まないならまだしも、浮かないって何よ。当然全

員顔面は真っ白、景色は紫色、指先はジンジン音を立て、全身に軽くやってくる震え。ここまで来てるのに、もうこの楽しい装置が多くの人に見てもらえる光景が臉の裏に映っているのになんて！慌てて引き揚げてどこに問題があったのかチェック。どこだ、どこだ、どこかの部品同士が干渉してる、どこ？と慌てるスタッフ全員。透明ガラスの水槽であれば

何処が干渉しているのか外から見分かれるところが、鉄板の水槽ゆえにどこが問題なのかもわからず、恐らくここだろうという部分を一つ一つ直しながら何度もテストを繰り返さないといけなかったわけです。救いはみんなが最後まで文句を言わずに真剣に取り組んでくれたことで、い歳のおっさんが集まって河童の形を風呂から上げたり下げたりと、見た目は滑稽な絵ではありますが、それぞれの役割を最後まで責任を持ってやり遂げようとする姿は今でこそ、ここでこっそり申し上げますが、感動していました。

まあ結局、部品の設計し直しなどが発生したものですから、工場テストは一〇日間ほどかかりまして、何とか無事に動作確認終了。いよいよ現地での設置となったわけです。

時系列的に逆転してしまいましたが、池は当然水を抜いて土木工事の準備を進めていました。水を抜いて魚を獲ってみたところ、池底の泥の量がすさまじく、1mくらい堆積した状態で、このまま基礎を打つてもほぼ確実に沈下するであろうとのこと。今度いつ触れるか分からないため、泥土の浚渫を含めて基礎工事を進めました。

現場の設置はいよいよチームの仕上げの作業なわけで、ああ、これで約一年一緒に頑張ってきたこのメンバーでの作業も終わってしまうのかと思うと少しさみしい気持ちで涙チヨロリ。機械の設置も完了、みんな髪を毛ボサボサの河童を持ち上げて池の中へ運び、ゆっくりと設置。フロート部分にみんな小さく名前を書いて、みなさん本当に長い間ありがとう、お疲れ様でしたとお別れいたしました。

平成二十六年二月十四日より一般公開とさせていただいたわけですが、これも、正直自分の中では一ヶ月で百人くらいの方が来てくれるといいなと思っていたんですね。まあ神戸新聞の記者の方も来てくれてはるし、百人超えるかな？超えたら嬉しいなくらいで。



ところが、新聞に載った週末、恐ろしいほどの数のお客さんが来られてまして、おいおい、池から死体でも出たのかとこっちが慌てる始末。

今までこの公園にこれだけの人が集まったことなんか記憶にないわけで、何が起きたのか理解にしばらく時間がかかったくらい大混乱。池の北側にある歴史民俗資料館の職員が来られたお客さんを数えてくれていたんですが、午前中四百人、午後六百人と嘘みたいな本当の話。おかげで隣接する福崎町の特産館「もちむぎのやかた」ではレストランに列がで、お土産物は売り切れが出るほど嬉しい悲鳴がこぼれましたようでございます。

いやあ新聞ってすごいねえなんて事務所でのんきにお話しておりますと、私宛にお電話が。ラジオで放送させてもらいたいので電話で出演お願いしますとラジオ関西さんから。ラジオ？ラジオに出るの？ちよつとちよつと！と大騒ぎ。緊張で軽くえびきながらも初のラジオ出演を済ませ、もうあんな緊張するの嫌だと言っていましたら、朝日新聞さんが来られて、ウェブでも公開するので簡単な短い動画を撮らせてくださいと言われまして、ガチガチに緊張して

カメラ前でしゃべったわけですよ。

朝日新聞に掲載されて動画のことを忘れていたんですが、私がサイボーグみたいになって喋っている動画がYahoo!のトップページに出てますよなんて言われて、一体何が起きているんだと見ましたところ、朝日新聞さんのサイトに出た動画がYahoo!動画で紹介された挙句、社会カテゴリーでアクセス一位になっちゃってしまいあの恥ずかしい姿が全国に配信されてしまったわけですね。その後、今度は関西テレビの夕方のニュースから取材のお申込みが。「テツテツテレビゆうてますよ!」「うそやん」

「はっちゃんのおんかーがてれびでやるからかっぱがしゅざいでレロレロ」  
「しっかり喋れ!」

テレビなんて当然遙か彼方の叶わぬ夢物語、そんな話がこんな平和な田舎町に舞い降りるなど誰が想像しましょう。電話口の「関西テレビのアンカーというニュース番組ですが」の切出しから頭は真っ白、とりあえず失礼の無いように「ハイ。ハイ」と答えておりましたらいつのまにやら取材の日も何もかもご決定という有様で。

夕方のニュースで放送されてからは他の局からも立て続けにニュース番組の取材申し込みが続き、キャストさん、ボイスさん、す・またんさんなど、「ありがとうございます、ありがとうございます」と頭を下げてましたら聞きなれないニュース番組名でお電話が。

「ナニコレ珍百景という番組です。」「はい・・・ハイ!?!?!?」  
と、とうとう有名バラエティ番組からの取材申し込み。その放送が特番で、珍百景に選ばれた上に、その中でMV珍を獲得するなど、大変良い扱いをしていただき感無量。

振り返りますと、いろんな壁がありました。が、「よくまあここまでやって来れたな」というのと、「よくまあここまで売れたな」が本音でございます。普段の役所業務では何の役にも立たない特技にタイミングよく光を当てていただいたおかげで、自分なりに楽しく仕事ができ、また福崎町を知らない方にも広く知ってもらえることが出来たというのは本当にうれしいな。また、あの河童には本当にお世話になっちゃったもんですから、

機嫌を損なわない様に、今も寒いけれど水に入って手で洗ってやっています。

この先何かやるんですかという質問もたまにいただきますが、色々頭の中で案は練りあがっているもの、やれるかどうかは分かりません。ただ、あの辻川公園という場所が町民の皆さんにとって、また福崎町へ観光に来られる方にとって心のなごむ楽しい場所でありつづけて欲しいなと願っています。

これからも辻川山公園の河太郎と河次郎をみなさんよろしくお願いします。





## 「ふくやま」

### 日本語サロン開設

ふくさき日本語ボランティアの会

副会長 中 塚 喜 博

現在、福岡町内の在住外国人は十二月末時点で三百二十八名に達し、増加傾向にあります。

私たちは、日本語学習や日常生活のアドバイスなど、在住外国人への支援が必要だと感じ、昨年四月に誰でも気楽におしゃべりできるサロンを立ち上げました。

月に二回、第二、第四日曜日午前十時から十一時三十分まで、文化センターで無料で開設しています。

現在、学習者は二十名程（中国、ベトナム、ブラジル、アメリカ等の出身者）です。サポートするボランティアは二十四名です。

開設時に兵庫県国際交流協会の講師の方から指導方法を教わり、今ではスタッフもお互い楽しみながら進めることができるようになりました。

内容は、日常生活に密着した買い物仕方、電車やバスの利用方法、銀行や病院でのやり取りなど、状況に応じて必要な会話を習得段階別のグループで学習しています。



また、お互いの国の文化を紹介して、国際交流を図っています。

サポートは決して難しくありません。外国語が話せなくても、関心のある方ならどなたでもご参加いただけます。

また、日本語学習を希望する外国人の方がおられましたら是非、誘ってあげてください。

事務局、ボランティアスタッフ一同、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

## クラブ紹介

### 「夢に向かって」

和太鼓・club F

代表 佐々木 貴 規

私たちは、平成十九年によさこい踊りとのコラボレーションを目的に、平成二十六年二月に公民館クラブに登録、四月から活動を開始しました。毎月、第二、第三、第四金曜日十九時～二十一時まで文化センターで練習しています。

講師の内海いっこう先生は、東京国際和太鼓コンテスト「大太鼓部門」で入賞されるなど、世界的なプロの和太鼓奏者です。

活動八年目になりますが、これまで順風満帆な道のりだった訳ではありませんでした。練習場の確保の問題やメンバーの減少でクラブの存続の危機もありました。しかし、発足メンバーの努力や先生のサポートにより、現在も活動を行う事が出来ています。

発足当時小学二年生だったメンバーも、現在は中学三年生になり、プロの和太鼓奏者を目指し、日々練習に励んでいます。型にはまらない演奏スタイルは、



昨年十一月の公民館クラブ発表会でも、好評を頂きました。

当クラブは大人から子供まで楽しめる練習内容になっており、今年度からはエンターテイメント性向上の為、新見美香先生による篠笛クラスも始動しました。

日本古来の楽器の素晴らしさ、楽しさが実感出来るクラブを目指し、今後も邁進して参ります。



**第三十三回  
福崎町美術展作品募集**

第三十三回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。  
皆様方のご応募を心よりお待ちしております。

**\*会期** 平成二十七年

五月十五日（金）  
五月十七日（日）

**\*会場** 福崎町エルデホール

**\*主催** 福崎町・福崎町教育委員会

**\*部門** 日本画・洋画・書・写真・

彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。

**\*作品搬入**

平成二十七年五月九日（土）  
午前九時～午後四時

**\*審査員**

日本画 平内 安彦  
洋画 初田 寿  
書 福島 松韻  
写真 柳原 香  
彫塑工芸 山本 和子



**山桃忌奉賛  
第三十回短歌祭作品募集**

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家記念館により山桃忌が行われています。

短歌祭は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌の当日に行っています。本年の短歌祭は、左記の要領で作品募集します。

**記**

**日時** 平成二十七年八月一日（土）

**場所** 福崎町文化センター

**主催** 福崎町文化協会・福崎短歌会

**作品** 未発表のもの・一人二首以内

**応募料** 一首につき五百円

**要領** 原稿用紙に楷書で縦書き

**宛先** 福崎町文化センター内

文化協会事務局 宛

**締切** 平成二十七年六月三十日（火）

**賞** 通泰賞・町長賞・議長賞・教育長賞・文化協会会長賞・商工会長賞・JA兵庫西賞・神戸新聞社賞の各賞と佳作多数

**選者** 楠田 立身 先生

（兵庫県歌人クラブ顧問）

**\*表紙の写真\***

河童の河太郎と昨年九月二十六日にリニューアルした、二代目河次郎。柳田國男の著作『遠野物語』に出てくる河童の記述を基に、体の色は赤く、表面もぬめつとした質感に仕上がっています。髪の毛も随分伸びて、尻子玉を食べようとしている姿は、初代よりも気持ち悪さがパワーアップしています。

出没时间は今まで通り、朝の九時から夕方六時までの毎時〇分と三十分の三十分間隔です。



初代 河次郎



公開後の様子

**編集後記**

たくさんの方々のご協力により、福崎町文化第三十一号を発売することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には大変お忙しい中執筆いただき、ご協力くださいましたこと厚く御礼申し上げます。

ありがとうございます。